

## 曲目解説

### Serenade for Strings in E major, op.22

弦楽セレナーデ ホ長調 作品 22

Antonín Leopold Dvořák (アントニン・レオポルド・ドヴォルザーク) 作曲

武藤 理恵 編曲



ドヴォルザークは、1841年チェコ(当時はオーストリア=ハンガリー帝国の一部)に生まれ、1904年62歳で同地に没した、チェコ国民楽派を代表する作曲家であり、後期ロマン派を代表する作曲家というにとどまらず、クラシック音楽史上屈指の人気作曲家である。ブラームスに才能を見いだされ、「スラブ舞曲集」で一躍人気作曲家となり、「モルダウ」で有名なスメタナとともにボヘミア楽派と呼ばれる。その後、アメリカに渡り、音楽院院長として音楽教育に貢献する傍ら、アメリカ・インディアンの音楽や黒人霊歌を吸収し、自身の作品に反映させ、不朽の名作である交響曲第9番ホ短調「新世界より」(当アンサンブルでは第38回定期で演奏)や弦楽四重奏曲「アメリカ」、「ユモレスク」などを遺したことはあまりにも有名。本曲は1875年に作曲された。

5月の二週間足らずの間に一気に書き上げたといわれる。彼は、その数ヶ月前に、ブラームスと音楽批評家ハンスリックらが審査員を務めるオーストリア政府からの奨学金の受賞者に選ばれた。それは、当時の彼の年収の2倍を超える額を5年間に亘って支給されるという大きなものであった。2年前に結婚した妻との安定した生活が保障され、彼が心安らかに幸せな気持ちでこの曲を書いたことは想像に難くない。この曲が、全体的に穏やかで優しく愛情に満ちた感じを聴くものに抱かせるのも、そうした彼の心情が反映されたものだからなのであろう。曲は、以下の5楽章から構成されるが、いずれの楽章もカノンの模倣効果によってしなやかな叙情を描くことに成功している。

#### 第1楽章 モデラート ホ長調 4分の4拍子 三部形式

第一部は、マンドラによって奏される暖かさをもった主題によって始まる。この主題はしばらく各パートで奏され、やがて中間部のリズムカルな主題が躍動感をもって現れる。第三部では、第一部の主題が複雑化され再現する。

#### 第2楽章 テンポ・ディ・ヴァルス 嬰ハ短調 4分の3拍子 三部形式

哀愁をたたえたボヘミア風の軽快さに満ちたワルツで、冒頭から第一主題が現れる。トリオの中間部では、対照的に流れるような旋律が印象的に反復される。

#### 第3楽章 スケルツォ ヴィヴァーチェ ヘ長調 4分の2拍子 三部形式

活発なスケルツォ主題が、マンドラとマンドリンのカノンで始まる。中間部では、叙情的な主題がマンドラによって奏される。

#### 第4楽章 ラルゲット イ長調 4分の2拍子 三部形式

マンドラがまさにセレナーデというべき旋律を歌い上げる。中間部では、対照的にリズムカルな主題がマンドリンによって奏され、最初の動機の変形旋律と複雑かつ美しく絡みあう。

#### 第5楽章 フィナーレ アレグロ・ヴィヴァーチェ 嬰ハ短調 ホ長調 4分の2拍子 ロンド形式

ロンド風な舞曲で構成される。冒頭、勢いの強い主題がカノンで奏される。その後、第一楽章の主題が回想的に現れ、しばらく奏された後、プレストの主題をもってコーダを形成し、この曲を終わる。

ところで、セレナーデ(あるいはセレナード(仏)、セレナータ(伊))と呼ばれる音楽は、古くは中世やルネサンス時代のものから現代のグレン・ミラーの「ムーンライト・セレナーデ」に至るまで実に幅広いが、本曲が作られた19世紀においてその定義は、「複楽章による大規模な合奏曲」といってよいであろう。同じ複楽章制の絶対音楽である交響曲と比べると、楽章数が多めであること、主題の展開や表現の濃密さよりも、旋律や響きの美しさや愉悦感などが重視される傾向にある。弦楽セレナーデは、チャイコフスキーの同曲(某人材派遣会社のCMで有名)と双璧をなすものであるが、両作品には作曲者の個性の違いが如実に現れて興味深い。独断で述べれば、メロディ:甘く派手で一度耳に入ると離れないチャイコフスキーに対し、地味で渋いがそこはかとない哀愁の漂う味わい深さを持つドヴォルザーク、リズム:宮殿の舞踏会でドレスを纏って踊るかのごとき優雅さのチャイコフスキーに対し、さわやかな青空の下、民族衣装を纏って軽快に踊るかのようなドヴォルザーク、ということになるだろう。演奏するにせよ鑑賞するにせよ、かめばかむほど味が出る奥深さを持った名曲といえるだろう。(参考文献:ポケットスコア「Dvořák セレナード ホ長調」日本楽譜出版社発行)本曲は1988年5月に編曲され、クリスタル・マンドリン・アンサンブル(プロ奏者の青山忠氏が主宰)第5回定期演奏会(1989年2月19日東京都武蔵野市民文化会館小ホール)でマンドリン弦楽合奏版として初演され好評を得た。

# Rhapsodie "España"

狂詩曲「スペイン」

Alexis-Emmanuel Chabrier (アレクシ=エマニュエル・シャブリエ)作曲

小穴 雄一 編曲



作曲家シャブリエは、1841年フランス中南部オーベルニュ地方はアンペールで生まれた。幼いころからピアノや作曲への才能を示し、特にピアノは天才と謳われたほどであったという。しかし父親の強い勧めによりパリで法律を学び、内務官僚の職に就いた。公務員生活の傍らで、フォーレやダンディなどの作曲家と親交を結び、独学で作曲の勉強を続け、同時にマネ、モネ、セザンヌら画家とも交わり、絵画の収集も行っていったという。

1880年、ミュンヘンでワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」を観たことで、音楽の道に専念することを決心し、同年内務省を辞し、プロの作曲家としての道を歩み始めた。彼の作曲家としての実働期間は、その後53歳の若さで没するまでの14年間と短

いことから、残されている曲数も限られている。狂詩曲「スペイン」は、その中でもっとも世に知られた曲であろう。本曲は、1882年に4ヶ月にわたるスペイン滞在期間の印象をもとに作曲された。おそらくは、かの地の情熱的な民族舞曲や奔放なジプシー音楽と出会い、大きな刺激を受けたに違いない。沸き立つようなリズムの上に自由で伸びやかなメロディを歌わせるこの曲は初演時から熱狂的な人気を博したという。「ホタ」や「マラゲーニャ」などスペイン固有のリズムを取り入れながらも、曲全体としては、いかにもフランス的な洒脱で都会的な印象を聴く者に残す、一種不思議な味わいのある小曲である。

原曲は、管・弦・打の巧みなオーケストレーションによる豊かな色彩感が特徴的であるが、マンドリン合奏では、音色においては素描的である一方、撥弦楽器ならではの歯切れの良いリズム感を味わっていただけることと思う。

# Granada ~ Suite Espanola Op.47-1 スペイン組曲より「グラナダ」

Isaac Manuel Francisco Albeniz (イサーク・マヌエル・フランシスコ・アルベニス)作曲

小穴 雄一 編曲



スペインを代表する作曲家アルベニス(1860-1909)は、4歳でピアノ演奏をするほどの天才ピアニストでもあった。マドリード音楽院でソルフェージュとピアノを学び、その間をぬって世界各地を演奏して回るが、23歳で妻ロシーナと結婚。居をパリに移し生涯をフランスで過ごす。パリではフォーレ、デュカスと交流し、その音楽的な影響は多くの作品に反映された。オペラやオーケストラ作品も残したが、特にピアノ曲を多く作曲し、当時からヨーロッパの音楽界で高い評価を得ていた。ロマン派的な小品も多く作曲しているが、1906年から没年の1909年までに作曲された12曲からなる組曲「イベリア」は、スペイン近代民族主義楽派としての作品において作者の魅力が発揮されており、スペイン音楽のみならず近代ピアノ音楽の最高峰のひとつである。

スペイン組曲は初期の作品であり、8曲から成るピアノの為の組曲として知られている。しかし、もともとは1886年に4曲(第1、2、3、7曲)が作曲されたきりで、残りの4曲(第4、5、6、8曲)は、タイトルしか残されていなかった。没後、出版社はこのタイトルをのみの4曲に対し、他の楽曲をあてがいこれを出版した。パネのきいたリズム、ギターを思わせる音色など、いずれもスペイン色の強い作品であり、ギターへの編曲版としても有名である。「グラナダ」はその第1曲目の作品で、アンダルシアの古都グラナダへの想いがこめられている。作者は22歳の時、グラナダで過ごし、独特の風情をもったその街をとて愛していた。故にこの曲について「狂おしいほどにロマンティックで、絶望的なほどに哀しいセレナードである」と手紙に記している。ギター風の伴奏、哀愁をそそる旋律など、美しい絵葉書の一束のように聴き手の心を旅情に誘い、個性的なメロディを豊かに生み出す天賦の才を証明している。1886年1月24日マドリードのサロン・ロメロにて作者自身により初演された。

尚、2007年フランス共和国大統領選挙で当選したニコラス・サルコジ氏の2番目の妻セシリアは、アルベニスのひ孫である。

## 「スペイン」第二組曲

鈴木 静一 作曲



Seitichi Suzuki

「鈴木静一」その名前をマンドリン関係者で知らない者がいるであろうか？日本のマンドリン文化を作品の面で支えてきた最大の功労者である。1901年3月16日、東京生まれ。幼少よりオルガンを覚え、A.サルコリの元で声楽家を目指すも師の勧めで断念し、マンドリンを弾き始める。1924年、イタリアに渡る。途中シベリウスに会い才能を認められ作曲活動を開始。1927年、オルケスタ・シンフォニカ・タケイ 主催の第1回作曲コンクールに「空」が2位入賞した。又、NHK ラジオ第1放送にマンドリン奏者として出演。処女作「山の印象」を発表後、多数の作品を発表したが、1936年、日本ビクター入社と共にマンドリン界から一時身を遠ざけた。以後1965年に復帰するまで、約450曲に及ぶ映画音楽、流行歌の作曲を手掛け、映画音楽をはじめとする商業音楽の世界で、頂点を極める活躍をした。黒沢明監督「姿三四郎」や「たんたん

たぬきの〜」の替え歌で歌われた「煙草屋の娘」が有名。1965年、旧友の小池正夫氏の死をきっかけに復帰。多くのマンドリン合奏曲、クラシックの編曲作品を発表すると同時に、日本女子大、中央大学、愛知学院大学、立命館大学など数多くの学生マンドリンクラブの技術指導にも情熱を注ぎ、マンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。1980年5月、民謡のふるさと「遠野郷」を発表。これが遺作曲となる。同年5月27日、惜しまれながら永眠。

交響詩「ヒマラヤ」はマンドリン合奏曲の集大成として起草していたものであり、病床にまで持ち込み書き綴られたが、幻の大作となってしまった。

本組曲は第一から第三までであるが、何れも1959年訪欧時の印象を基に作曲。どの曲も極めて写実的な表現を特徴としている。第二組曲は1967年、当時の岐阜マンドリン協会で初演され、以後氏の代表的な作品となった。

< 作者記 >

**1. "汽車の窓から" (グラナダ=ロンダ)** カタタン、カタタン……。列車は単調なリズムをくり返し乍ら、緑より乾いた地肌の目だつ畑の中や、濃緑のオリーブに覆われた丘の間を走って行く。時々停る集落の家々は古く水汲場に集まる女達や、道端で立話する男達の服装に古いスペインの面影を見る。不つり合に立派な寺院のある小さい街を過ぎる。丁度鳴りだした鐘の音が、列車の車輪のリズムと響きあい楽しい音楽を形成する。のどかなスペインのローカル線の点描。

**2. "モロッコへの憧れ" (ジブラルタル)** ジブラルタルはイベリア半島の最南端、エウロパ岬である。スペインの領土であるが、その岬角にそびえる岩山はイギリスの要塞とし、かつては地中海西の出入口をやくす要衝であったが、今は砲臺の残がい軍国の名残りをとどめているだけ。高い岬頭に立つと、東には波静かな地中海、西は眼下の海峡に続き大西洋が広がっている。私の目は南方20キロの海峡を隔てて連なる、一連の陸地に吸いよせられる。アフリカ大陸の西北端モロッコである。その名の通り、白壁の家が灼熱の太陽を照りかえし真紅のブーゲンビリアが咲き、熱風にそよぐタマリンドの木立、迷路につづられたカスパのある異郷の街カサブランカ タンジール。私のモロッコへの憧れは際限なくふくらむ。

**3. "悲しき闘牛" (ベレス)** 街は人出で埋まっているが、不思議な程静かだった。その異常な静けさには何かが起こる気配があった。遠くで花火が上り、一団の行列が近づく。聖体行列だった。今日この街は闘牛祭を迎えようとしているのである。豪華な聖体行列が、ある聖堂に到着すると同時に、待ちに待った闘牛が始まる。闘牛場では金ピカ衣装のピカドール、マタドールがおなじみのファンファーレにつれ、はなやかに登場する。“闘牛”なんと残酷な見せ物であろう。幾本もの槍や剣が突き刺された憐れな牛は、赤い布にまどわされ、なぶり殺しにされる。貧弱なブラスバンドが非情にはやしたて、観客の熱狂は極点に達する。遂にマタドールが最後のとどめを刺そうとする。私はたまりかね、闘牛場から逃げ出してしまった。

**4. "祝宴"** 闘牛が終わると、人々は街に溢れ出し、パラオの街路で祝宴が始まる。辻ではジブシーのフラメンコ踊りに手拍子、足拍子、カスターネットの音がはねかえり、人々も負けずに踊り歌い、街から街を押廻す。この底抜け騒ぎは夜と共に高潮する。(3-4 楽章は続けて演奏する)

フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットなどが本来は編成に加わるが、あえて管楽器を加えないモノトーンの世界は、弦の響きだけでも演奏者にとって手応え十分である。

## 編曲者紹介

**武藤 理恵** (むとうりえ) 5歳より15歳まで桐朋学園子供のための音楽教室にて、ピアノ・聴音・ソルフェージュを学ぶ。1978年第32回毎日学生音楽コンクールピアノ部門入賞。桐朋女子高等学校音楽科および桐朋学園大学音楽学部音楽科卒業。1983年より6年間、二期会・日生劇場のオペラ伴奏を、また1984年より2年間、桐朋学園大学音楽学部声楽科伴奏研究員を務める。現在、器楽・声楽・合唱の伴奏ピアニストとして活動する一方、マンドリン合奏曲の作曲、編曲も精力的に行っている。

**小穴 雄一** (おあなゆういち) 1957年東京生まれ。高等学校入学後マンドリンを始める。マンドリンを竹内郁子女史に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。大学4年次に慶応義塾マンドリンクラブの常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らクリスタル・マンドリン・アンサンブルの客演指揮、アンサンブル・アメデオの指揮者兼編曲者として精力的に活動中。当アンサンブルは、小組曲(33回定期)、カレリア組曲、組曲「展覧会の絵」、組曲「火の鳥」より「終曲」(35回定期)、組曲「惑星」より「木星」(36回定期)、組曲「胡桃割り人形」(37回定期)、交響曲第9番「新世界より」(38回定期)等々を小穴氏の編曲で演奏。

今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、お二人に心よりお礼申し上げます。

### 編曲作品の妙味



#### (第39回定期演奏会に寄せて 常任指揮者 松永恒一)

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル(FSME)は近年、クラシックの編曲作品に意欲的に取り組んできた。「展覧会の絵」(ムソルグスキー)、「カレリア組曲」(シベリウス)、「木星」(ホルスト)、交響曲第9番「新世界より」(ドヴォルザーク)等々が強く印象に残っているが、どの曲も10年前からすれば凡そ考えられないプログラムである。FSMEはまさに発展途上にある。マンドリンのオリジナル作品にも名曲は数多くあるが、その枠を超え、これらクラシックの名作に取り組むことは、団員にとってひとつの夢の実現である。FSMEはこの熱意と意欲において、他の追随を許さないものと自負している。しかしいくら熱意があっても、ひた

すらにオーケストラの真似をしているだけでは意味がない。どのような作品を取り上げても、マンドリン合奏ならではの表現を最大限に生かし、その作品に新しい命を吹き込む気概で取り組みたいものだ。

今回の定期演奏会ではドヴォルザークの「弦楽セレナーデ」に挑戦する。第1部で演奏するが団員にとって本曲がメイン曲であると言って過言ではない。この曲はFSMEが過去演奏した多くの楽曲から見ても明らかに一線を画する風格があり、今回プログラムに入れるのにかなりの勇気が必要とした。作品の要求する芳醇な音楽性と自らの演奏技術の狭間で妥協せざるを得ない部分が多々あることも否めない。まさに「無謀な」挑戦かもしれないが、FSMEは実はこれが楽しいのだ。

楽しいと書いたが、音楽を損なわず演奏することなくしてその楽しさはない。演奏を自ら楽しむには当然それなりの修練を必要とする。自ら持てるものすべてを注ぎ込んで演奏する、奏者のその「弾きさま」は良きにつけ悪きにつけ必ず客席に届く。そしてそれはステージの上に跳ね戻ってくる。この循環が音楽の一回性、すなわちライブ音楽の醍醐味である。

「弦楽セレナーデ」は弾くたびに新鮮な味わいがある。それはこの曲の持つ作品力に他ならない。その作品力に甘えることなく、その奥深い魅力をマンドリン合奏という新しい切り口から表現する。これが「挑戦」する意味であり、編曲作品の妙味である。

来年の定演は第40回の記念演奏会となる。FSMEの歴史は一本道ではなく、実はさまざまな紆余曲折を経て今日に至っている。団員も変われば演奏する音楽も変わってきた。その長い歴史のひとつの節目として、ショスタコービッチの大曲 マンドリン合奏版の世界初演 - に取り組むべく現在準備中である。来年の定期演奏会にもどうぞご期待をいただきたい。

FSMEを今日まで支えていただいた多くの方々に感謝しつつ。(2007年12月)

